

位置と環境

京田遺跡は川内川下流の右岸で、薩摩国分寺跡の東側に隣接する低湿地に所在している。遺跡の標高は約5mであり、国分寺跡が所在する台地との比高差も約5mである。遺跡の東側には銀杏木川が南方向に流れており、遺跡周辺も含めて一帯は水はけの良くない水田地帯となっている。また一部は客土が行われ宅地となっている。

調査の経緯

遺跡は九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い、鹿児島県教育委員会が平成12年9月から平成13年5月まで調査を実施した。

発掘調査は路線幅に限定されており、幅約11m程度の細長い面積を行った。少し下げると湧水が激しく、水中ポンプで水を汲み出しながらの調査であった。

遺構と遺物

調査の結果、本遺跡は弥生時代と奈良～平安時代の複合遺跡であり、両方の時代とも遺跡の主体と考えられる。

弥生時代の遺構として畦で小さく区切られた水田跡が検出された。畦のふちにはクイや板を打ち込んだものもあった。また、河川跡の中には「V」字状に並ぶ杭列が検出され、「ウケ」と呼ばれる魚を捕る施設の可能性が考えられる。川岸では堅果類が残存する土坑が複数発見されており、水さらし用の土坑と考えられる。

弥生時代では多種の木製品が出土しており、又鋤や平鋤などの農具や、櫓、網杵などの漁労具、また一木梯子、横架材などの建築材も認められ、本遺跡の重要性が理解できる。

奈良～平安時代の遺構として、水田跡や杭列などが検出されている。出土遺物では土師器や須恵器の坏・埴・蓋などのほか、国分寺瓦や緑釉土器も出土している。また高と書かれた須恵器埴も出土している。

注目されるものとして鹿児島県初出の古代木簡が



第1図 京田遺跡の位置

出土している。木簡は杭として再利用されていたものであり、長さ約40cmで部分的に樹皮が残存しているものの、幅約3cmのほぼ四角形に面取りし、墨書は4面全体に施され、内容は左側の面へ続くように記載されている。通常の木簡は板を利用しているが本例は棒状の木を利用した特異な形状である。

墨書の内容は嘉祥3年(西暦850年)3月14日に郡司の長官である大領薩摩公と次官である擬小領が何らかの理由(墨書が判読できない二面に記載)で九条三里一曾□□にある二反の水田を差し押さえたことを周辺の村落の有力者に触れた告知札である。

年紀が明確であり当時の条里制の表記のみでなく、土地支配の実態もわかり、かつ郡領としての薩摩公の存在など資料的価値が極めて高い。

この資料的価値から平成14年4月23日に本県の考古資料としては初の県指定文化財となっている。

特徴

京田遺跡は弥生時代の水田跡としての生産遺跡と古代の水田及び国府関連の資料から極めて重要な遺跡として認識できる。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

宮田栄二・川口雅之2002「鹿児島・京田遺跡」『木簡研究』第24号 木簡学会

鹿児島県立埋蔵文化財センター2005「京田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(81)

(宮田栄二)



写真1 弥生時代の水田跡

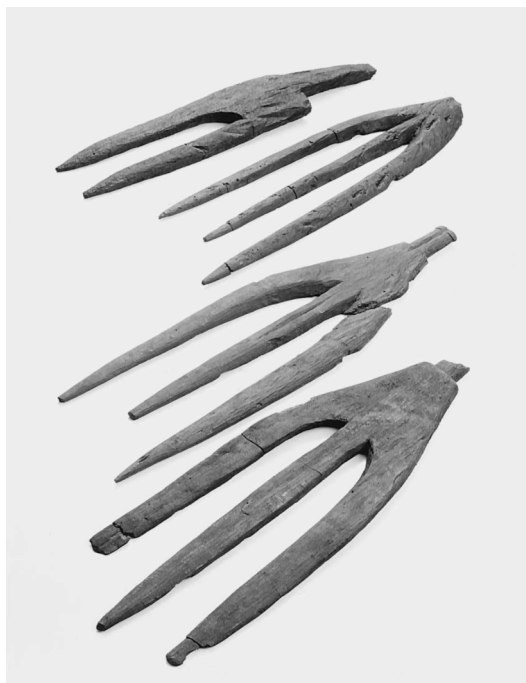


写真2 弥生時代の鍬



写真3 古代木簡